Neue Studien zur deutschen Grammatik

ドイツ語学講座

Ⅳ

有田　潤 著

1990

南　江　堂

Neue Studien zur deutschen Grammatik

ドイツ語学講座

Ⅳ

有田 潤 著

江苏工业学院图书馆
藏书章

1990

南 江 堂

Neue Studien zur deutschen Grammatik
ドイツ語学講座 IV
1990年11月20日 初版発行

著 者・有 田 潤 © Jun Arita, 1990

発行所・株式会社 南江堂
〒113 東京都文京区本郷3丁目42番6号
☎ (03)811-7239
振替 東京2-149

印刷・研究社印刷

ま え が き

第 IV 集をお送りする.

『講座』は本集までで 58 点になるので, 体系的な角度で見た論題の全体を「系統的一覧」にした. 適宜の利用を望みたい. この『講座』とはべつに「入門　ドイツ語冠詞の用法」を単行本で出す予定である.

現在第 V 集を執筆しているが, 出版は 3, 4 年後になるとおもう. 第 VI 集(最終巻)がいつになるか分からない. 最後まで努力したい.

日本独文学会会誌「ドイツ文学」84 (1990 年前期号)に 佐藤　清昭 氏の本『講座』に対する書評が掲載された. 関口語学の専門研究者である同氏の発言は著者にとってまさに頂門の一針というべきで, ご参考までに, 評者の許諾をえて再録した. 指摘された点については改めて考えを述べる.

このたびもいろいろご配慮を賜わった南江堂常務 荒井　孝二 氏に心からお礼をもうしあげる. 校正には早大院生 高沢　一広, 黒田　晴之 両君ならびに妻文子の協力をえた.

どうにかここまでたどりつけたのは, 公私にわたり著者を激励してくださる方々の心くばりのおかげである. 著者はそれを忘れないだろう.

1990 年 8 月　　著　者

D＝Duden, Das große Wörterbuch der deutschen Sprache.
K＝Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache.
W＝Brockhaus Wahrig, Deutsches Wörterbuch.
L＝Der neue Muret-Sanders, Langenscheidts Enzyklopädisches Wörterbuch.
S＝Stilwörterbuch der deutschen Sprache, Duden.
『紀要』　　＝早稲田大学語学教育研究所紀要
I, II, III, . . . ＝第 I 集, 第 II 集, 第 III 集, . . .
1, 2, 3, . . . ＝第 1 章, 第 2 章, 第 3 章, . . . (『講座』全体の通し番号)

既刊 (1985 年) 第 I 集

1 ドイツ語冠詞序説
2 1234 か NADG か
3 物質名詞・抽象名詞
4 抽象名詞の量的扱い
5 換言名詞
6 独立述語
7 「意味形態」の成立
8 用語としての接続法
9 非人称語法
10 無主語文
11 応用面からみたアスペクト
12 Er werde
13 ich と間接話法
独文要旨 (1 章, 13 章)

既刊 (1987 年) 第 II 集

14 冠詞用法のシステム
15 関口氏の無冠詞説
16 文内の無冠詞形
17 情緒型の無冠詞形
18 「意味形態」批判
19 支配と規定
20 基礎語の位置
21 説明的形容句
22 A が B になる
23 直説法の sollte
24 直接引用
『冠詞』研究終了に寄せて
独文要旨 (20 章)

既刊 (1988 年) 第 III 集

25 ドイツ語の基本文型
26 ワク外構造
27 ドイツ語界の文法用語
28 -mut の性
29 前置的接続詞
30 述語と述語内容語
31 述語の無冠詞形
32 ドゥーデンの文型論
33 「条件法」がドイツ語にあるか?
34 gereichen, 二重 D 格, zumute
35 発端の過去完了形
36 「見るも哀れ」
——zu 不定句の 1 用法——
37 無主語文 (続)
38 würde の諸相
39 未来と未来形
40 フランス語の接続法
——意味類型の視点——
雑誌『ドイツ語研究』
ドゥーデン編集部による訂正
独文・仏文要旨 (37, 38, 39, 40 章)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第 V 集　予　定

言語の仮構性
名詞付加と動詞付加
不定冠詞の1用法
事態の無冠詞形
前置詞＋形容詞＋名詞
A 格名詞の問題
テクスト研究　B
sich . . . lassen
存在型と結合型
短縮型間接話法
kommen と gehen
間接話法の諸形態
仮定の würde
consecutio temporum
過去-würde
接続法の sollte
和文独訳——システムの試み—— [2]
ラテン語の接続法 [2]

雑誌『独文評論』

系 統 的 一 覧

解　説

この『講座』の各章はそれぞれ独立の文法論議で，原則として他の章を前提としない．あとの章が先立つ部分を参照することはあるけれども，先行の章なしでも理解できるように述べられている．むろん著者の脳裏には一貫した文法観と論述方針がある．しかしそれは，枝葉末節にいたって繁茂する可能性のある植物のたぐいであるから，全体を同じ密度の「文法概説」のかたちで組織することはできない．以下に掲げるのは，本『講座』をはじめから系統的に書きすすめたと想定して論題を整理したものである．ただ，この分類には便宜的な処理もあるからお含み願いたい．[1] [2]. . . は分割収録，[V] は第 V 集の予定稿を指す．

(1)　つづりの問題
41　Photograph か Fotograf か

(2)　外国語学習・ドイツ語教育
2　1234か NADG か
[V] 言語の仮構性

(3)　語感の問題と「意味形態」
44　関口語学の一面
——語感の分析——
7　「意味形態」の成立
18　「意味形態」批判

(4)　文法用語の検討
27　ドイツ語界の文法用語
30　述語と述語内容語
29　前置的接続詞

(5)　文型・文構造
25　ドイツ語の基本文型
26　ワク外構造
19　支配と規定
32　ドゥーデンの文型論
20　基礎語の位置

51 後置詞，追加詞，添加副詞
[V] 名詞付加と動詞付加
[V] A 格名詞の問題

(6) **述語の研究**
6 独立述語
21 説明的形容句
22 A が B になる
46 A 格述語
47 述語型副詞の用法

(7) **時称とアスペクト**
39 未来と未来形
11 応用面からみたアスペクト
35 発端の過去完了形

(8) **法と関連問題**
8 用語としての接続法
40 フランス語の接続法
58 ラテン語の接続法 [1]
[V] ラテン語の接続法 [2]

(9) **間接話法の関連**
12 Er werde
13 ich と間接話法
24 直接引用
55 間接話法の定形
53 局所的間接話法
[V] 短縮型間接話法
[V] 間接話法の諸形態

(10) **würde と関連問題**
38 würde の諸相
33 「条件法」がドイツ語にあるか?
[V] consecutio temporum
[V] 過去-würde
[V] 仮定の würde

(11) **非人称形と無主語文**
9 非人称語法
10 無主語文
37 無主語文(続)
48 非人称語法の論理
56 非人称 A 格の es

(12) **冠詞の研究**
1 ドイツ語冠詞序説
5 換言名詞
14 冠詞用法のシステム
15 関口氏の無冠詞説
16 文内の無冠詞形
17 情緒型の無冠詞形
31 述語の無冠詞形
43 auf, 引用符，無冠詞形
[V] 不定冠詞の1用法
[V] 事態の無冠詞形
[V] 前置詞＋形容詞＋名詞

(13) **量の範疇**
3 物質名詞・抽象名詞
4 抽象名詞の量的扱い
42 量の範疇

(14) **語彙・成句の研究**
28 -mut の性
23 直説法の sollte
34 gereichen, 二重 D 格，zumute
36 「見るも哀れ」
——zu 不定句の1用法——
50 状態動詞と haben
52 mögen の用法
[V] sich . . . lassen
[V] kommen と gehen
[V] 存在型と結合型
[V] 接続法の sollte

(15) **文体・修辞**
54 事物主語の傾向

45 頭韻法

(16) テクスト研究

49 テクスト研究 A

[V] テクスト研究 B

(17) 和文独訳

57 和文独訳——システムの試み [1]

[V] 和文独訳——システムの試み [2]

な進展である.

4. 本「講座」には以上述べたほか，以下の優れた特徴がある．第 I・第 II・第 III 集を通じて各章の有機的な連関が図られ，また第 IV 集以降への発展が予告されていること，各章のはじめにある「解説」と当該の問題点を指摘する典型的な例文，論述の途中あるいは最後に見られる論点の総括，および論旨の図示・表示など，全体に読者の理解を容易にする配慮がなされていること，文学作品に限らず，自然科学書，新聞，雑誌，日本文学の翻訳に至る，豊富な文例と適切な訳文が挙げられ，論点が実証的に裏付けられていること.

しかし，次の点は改善の余地があると思う．用例に「時代性」と「文体性」の統一が図られていない場合があること（第 31 章，第 34 章），学術文献の出版年・ページが不明なことが多く，また例文用文献は著者名しか挙げられていないこと，句点の代わりにプンクトが使用されているために極めて読みにくいこと，例文を指示する番号が不明確な場合があること.

5. 第 I 集から通じて合計 40 の論考で著者は，例えば「ワク外構造の諸段階」，「würde の種々の用法」など，ドイツ語教師にとって「既知の」ものでありながら，「認識された」ものとならずにすんでいる多くの問題に，希・羅・仏・英・露・西・伊・蘭・葡・エスペラントという，個別言語についての豊富な知識を駆使して，ひとつひとつ誠実に答えていく．その意味で本「講座」は，ドイツ文学・ドイツ語学「研究者」であると同時にドイツ語「教師」でなければならない我々に打ち鳴らされた警鐘の書と，私は思う．つまり，大学におけるドイツ語教育のあり方については種々論議されながら，ドイツ語教師としての「自覚と能力」は不問に付されることの多い我が国のドイツ語教育界に対して，我々自身の「精進」を促す書である．同時に本「講座」は（関口文法に「発展」の基礎を与え，「発展」の実際を提示しているという意味で），その主な対象を「主体」対「主体」の次元へと変えつつある今日の言語学に，意味形態文法の意義を示す書でもある．教育上および学術上多くの示唆を含む本「講座」の続集に期待をしたい.

（南江堂，1988）

書　評

解　説

以下は学会誌『ドイツ文学』84 (1990) に掲載された佐藤清昭氏の本『講座』に対する書評で，第 I, 第 II 集に言及しつつ，主として第 III 集を紹介したものである．同氏の許諾をえて再録する．拙著を取りあげてくださったことに深く謝意を表するとともに，指摘された諸点についてはべつの機会に考えたいとおもう．

佐藤清昭(独文学会員)

1.　本書は，著者有田潤氏が数年前より上梓を続けている「ドイツ語学講座」の第 III 集である．第 I 集は 1985 年に出版され，「ドイツ語冠詞序説」・「『意味形態』の成立」をはじめとする 13 の論文が掲載されている(本文 158 ページ)．第 II 集は 1987 年に出版されて，「冠詞用法のシステム」・「『意味形態』批判」など 11 の論文が載っている(本文 145 ページ)．1988 年に出された第 III 集は，本文としての 16 編の論考のほかに，第 I 集と第 II 集の書評(再録)，第 37・第 38・第 39 章のドイツ語要約，第 40 章のフランス語要約，雑誌『ドイツ語研究』(三修社)の目次とそれに対する有田氏のコメント，そして Brockhaus Wahrig の Ergänzung の項に認められた誤植について有田氏がドゥーデン編集部と交わしたやり取りなどを含む(本文 270 ページ)．なお，第 III 集の 16 編の論考には第 I 集より続いている通し番号が付されている．各章の題名は次の通りである．

25　ドイツ語の基本文型
26　ワク外構造
27　ドイツ語界の文法用語
28　-mut の性
29　前置的接続詞
30　述語と述語内容語
31　述語の無冠詞形
32　ドゥーデンの文型論
33　「条件法」がドイツ語にあるか?
34　gereichen, 二重 D 格, zumute
35　発端の過去完了形
36　「見るも哀れ」 — zu 不定句の 1 用法 —
37　無主語文(続)
38　würde の諸相
39　未来と未来形
40　フランス語の接続法　— 意味類型の視点 —

2. 本「講座」の特徴のひとつは，実用上・教育上の観点に基づく，著者独自の文法構想が体系的に示されていることである．「実用上・教育上の観点」とは，「ドイツ語を外国語として学ぶもの，教育するものの観点」ということで，これはまず Helbig/Buscha, Schulz/Griesbach, Duden という文法書の批判として現れる．近代言語学の成果を安易に取り入れるあまり，教育の上では逆効果となっている例に対する批判である．例えば，品詞分類の際に一貫して「統語論」的基準にしたがう Helbig / Buscha (1972) に対して，著者はそれでは少なくとも「実用的な」文法記述は出来ないとして，「意味」の視点を随時取り入れる（第 29 章，そのほか第 27 章，第 32 章）．ドイツ語の「文型」の確立を目指すこと（第 25 章，第 32 章，第 37 章），希・羅の伝統にまでさかのぼって，ドイツ語界の用語を体系的に統一しようとすることも（第 27 章），それが「実用上・教育上」有益であるからである．

3. 著者が関口存男氏から少なからぬ影響を受けていることは，その用語（「冠置」69 ページ，「machen 型動詞」119 ページ，「意味のタイプ」167, 242 ページ），対話形式の論述方法（第 27 章，第 30 章），関口氏の引用（第 27 章，第 40 章），「述語」についての著者の見解（第 30 章，第 31 章，第 36 章），「言語外事実」と「言語」との明確な区別（第 40 章）などに認められる．しかし注目すべきは，従来の意味形態文法「研究」の傾向として，関口氏の理論・実績を無批判に繰り返すに過ぎない場合，あるいは本質的な理解を踏まえないために誤った批判に陥る場合などが少なくない中，本「講座」の著者は関口氏の理論を客観的に批判継承し，それを発展させることに成功している事実である．これが本「講座」のもうひとつの，そして本「講座」を画期的なものとしている特徴である．

著者はまず，関口文法の中心概念である「意味形態」を実証に基づいて解釈することにより，この文法に発展の「基礎」を与える．第 7 章「『意味形態』の成立」（第 I 集）と第 18 章「『意味形態』批判」（第 II 集）である．ここでは，第 1・第 2・第 3 意味形態の精密な分析が行われるが，それと同時に例えば「意味形態」という用語の「不適切性」を指摘するなど，関口氏の非も客観的に認められていく．この二つの章は，関口文法研究者にとって必読のもののひとつであろう．しかし，第 2 意味形態について著者は，それを「普遍的」とする一方で（第 II 集 56 ページ），個別言語で経験的に確認できるものとも理解しており（同 53 ページ），明確さに欠けるように思える．私は次のように，関口氏が「総合文法」を指向する際の第 2 意味形態は純粋に「普遍的」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に理解すべきものと思う．つまりここでは，「経験的一般性」(Allgemeinheit) から区別されなければならない「普遍性」(Universalität) が問題なのであり，「普遍的」な第2意味形態は，個別言語の知識から独立して求めるべきである．我々は，各個別言語に認められる「意味形態」について，それがなぜそもそも存在するのかと問うべきであって，その逆に意味形態に関する理論を，各個別言語の経験的な研究の結果としてはならないのである．また著者は，第1意味形態を「規定関係」とだけ定義し(第I集75ページ，第II集42ページ以下)，それが「意味論」上の「規定関係」であり，「統語論」上・「形態論」上のそれでないことを明示しないが，これは(前後の論述から明らかとはいえ)言葉不足であろう．この二つの規定関係の相違が意味形態文法の基礎のひとつをなすだけに，残念に思う．第1意味形態と，「特殊化・具体化・換言」という「考え方」の関係が明瞭でないことも心残りである(著者はこれらの「考え方」を第1意味形態とされるらしい)．第II集44ページに引用されている関口氏の論述の解釈の違いによるのだが，私は第1意味形態を純粋に「意味論上の規定関係」とだけ理解し，「特殊化・具体化・換言」という「考え方」は，第2意味形態の範疇に入れるべきものと思う．

本「講座」が関口文法の「発展」のひとつの形態を示しているという意味では，特に次の各章が注目に値する．第40章：フランス語の「接続法」という形態の枠組みの中で問題となる「意味類型」として，「要求」と「不確定」(後者はさらに「仮構的延長」と「可能性」に分かれる)を確認し，これを表現するためには現代フランス語に，接続法を使ったどんな表現形式が存在するかが求められる．これはフランス語の接続法についての「総合文法」的研究として画期的なものである．第29章：als と wie を「前置詞」とする Helbig / Buscha の批判から出発し，Duden (1984) のこの問題の取り扱い方にも不満を示して，als と wie を「前置的接続詞」とする関口氏を支持する．同時に関口氏の論述の疑問点が指摘され，著者独自の見解が挙げられる．第37章：関口氏の論文「Es の省略について」を基礎とし，それと重複しないように「主語を欠く文型」が整理補填される．第39章：人間の意識が「今後」について取る「欲求」と「推量」という形についての，著者の哲学的見解が述べられた後，未来形の本来の話法的色彩が「推量」であるとし，「欲求」は「推量」に添加されたものとする．さらに本「講座」では，関口氏の「第2意味形態」が「意味類型」という「説明的」名称で言い替えられて一貫して使用されているが，これも意味形態文法の大き

まえがき　i
系統的一覧　iii
書　評　viii

41　Photograph か Fotograf か　1
42　量の範疇　12
43　auf, 引用符, 無冠詞形　33
44　関口語学の一面　——語感の分析——　42
45　頭韻法　45
46　A 格述語　65
47　述語型副詞の用法　103
48　非人称語法の論理　115
49　テクスト研究 A　140
——「トーニオ・クレーガー」——
50　状態動詞と haben　149
51　後置詞, 追加詞, 添加副詞　157
52　mögen の用法　175
53　局所的間接話法　189
54　事物主語の傾向　195
55　間接話法の定形　200
56　非人称 A 格の es　207
57　和文独訳——システムの試み [1]　230
58　ラテン語の接続法 [1]　260

雑誌『独語文化』　265
独文要旨 (45, 46, 48, 56 章)　272

41　Photograph か Fotograf か

——よろめくドイツ語正書法——

解　説

Foto や Telefon は見慣れたつづりであるが，ph は今後どんどん f に書き換えられるのであろうか．ドイツ語の正書法は日本語などに比べてはるかに安定しているけれども，問題が全然ないわけではない．

Zum besseren Verständnis der in diesem Buch angesprochenen Ereignisse scheint es uns nützlich, in kurzen Zügen die Biografie Andrej Sacharows zu skizzieren.　(Piper, Der Verlag, 1986)

本書に述べられている出来事をよりよく理解してもらうには，アンドレイ・サハロフの伝記を素描しておくのが便利であろう，とおもわれる．

I.　出発点

若先生： 最近読んでいた本にこうあったんです．あれあれ，こんなつづりがあるのかいな，とおもって辞書を引くと，やっぱり Biographie が正しい．Fotograf なんかはもうたいして珍しくないようですが，昔は Photograph しかなかったわけですね．辞書類に出ているものは仕方がないとして，まさか哲学を Filosofie とは書けないでしょう？

わたし： そのうちに「正しい」書法は Filosofie である，Philosophie は古い，ということになるかもしれないよ．

若先生： しかし Mephistopheles を Mefistofeles なんてやったら，ヴァイマルの墓の中でゲーテが寝返りを打ちますよ．

わたし： まあね．

若先生： いったい，この ph と f はどういう関係になるんでしょう．

わたし： 話はギリシア語にさかのぼる．君は Φ と ϕ という文字を知ってるね？

若先生：「ファイ」でしょう？ Φ は大文字，ϕ または φ は小文字です．

わたし：「ファイ」という読み方は英語風なのだ．君は phi のつもりでそういうわけだね？

若先生： そうです．日本ではたとえば関数を示すのに $f(x)$ のほか $\phi(x)$ と書いて「ファイ・エックス」と読んでますね．π を「パイ」というのも英語読みなわけですが．

わたし： ドイツでは $\Phi\phi$ を「フィー」，$\Pi\pi$ を「ピー」と読む．

若先生： 問題は $\Phi\phi$ と ph や f との関係です．古代ギリシア語では $\Phi\phi$ はどういう音を表わしたのですか．

わたし： その前に断っておくが，古代では Φ だけで，小文字の ϕ, φ は近世になってから字形が決まったのだ．

若先生： では小文字だけで話を進めることにして，ϕ の読み方です．

わたし： これは /p/ からすぐ /h/ に移る音を表わす．

若先生： どうやって発音します？

わたし： 君は英語の top hat「シルクハット」をどう読むね？

若先生：「トップ・ハット」でしょう？

わたし： その「プ・ハ」を発音するには /p/ のすぐ後に /h/ と続けるわけだね．それがまさに ϕ の読みだ．

若先生： すると古代ギリシアでは ϕ は /f/，いわゆる「唇歯音 Labiodental」じゃないわけですね？ しかし ϕ が /f/ でなく /ph/ だったという証拠がありますか？

わたし： ドイツ語に Aphorismus という語があるね．

若先生：「箴言」とか「金言」とか訳されています．

わたし： この語はすでにギリシア語で *αφορισμος*, aphorismos という形で存在するが，前置詞 *απο*, apo と動詞 horizein [ホリゼイン]「限る」からできている．(以下ギリシア語の気息記号とアクセント記号を略す)

若先生： それで？

わたし： 両者がつながるときに apo の -o- が脱落して，ap- と -horizein が一体となり aphorizein という複合動詞ができる．ここで /ph/ という読みに合わせてつづりを π から ϕ にした．だから読みは [ア „ポ“ リゼイン] に近かったろう．あるいは [ア „プ$_{\text{ホ}}$“ リゼイン] かな．

若先生： でもなんとなくピンとこないな.

わたし： そうかね. 君は新約聖書のパウロの書簡にピリピ人とかエペソ人とかいう名前が出てくるのをご存じだね.

若先生： 音の感じが面白いですね,

わたし： あれは邦訳者たちがギリシア語の地名,

Philippoi (*Φιλιπποι*) ピリッポイ　　ラテン名：Philippi

Ephesos (*Εφεσος*) エペソス　　ラテン名：Ephesus

の本来の読み方に忠ならんとして考案した苦心のカナ書きなのだ.

若先生： ドイツ語にも今の top hat みたいな場合がありますか?

わたし： Klapphut [クラップ・フート]「オペラハット」なんかどうだろう? -pph- のところが /ph/ になるよ.

若先生： すると Photo「光」はギリシア語のままなら [ポト] あるいは [ポートー] なのですね. それがどうして [„フォ“ ト] と f の音になるんです?

II. ph から f へ

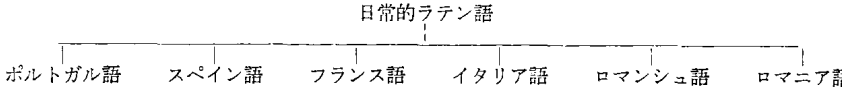
わたし： ここでローマ人にご登場願う. 彼らのラテン語にはこの *Φφ*=/ph/ に相当する音韻も, したがってそれを表わす文字もなかったらしい. しかし彼らはギリシア人を学問の師と仰ぎ, ギリシア語の知識を教養の基本とする. それでギリシア語の語彙を借用するにあたって, ラテン文字を用いて借用語の表記を考案した. *Φ* や *φ* の場合は p と h を組み合わせて, たとえば「哲学」*φιλοσοφια* は philosophia と「転写」(phonetische Transkription, 英：transliteration) した.

若先生： すると「ピロソピア」といってたわけですね?

わたし： ローマ人の発音を聞いたわけじゃないから保証はできないが, まあそれに近かったろうね.

若先生： それがどうして「„フィ“ ロソ „フィ“ ア」になるんですかね.

わたし： それは, 古代末期のラテン語の推移か, 日常的なラテン語からロマン諸語が成立して, それぞれ独自の発達を遂げる過程か, どちらかで生じたことだ.



ph というつづりを /f/ と読むようになったのはいつのことか，よく知らないけれども，ともかく /f/ と読む文字 F f は以前からあったから，ph の実際の発音に合わせて表記を f に置き換える言語も現れた．

	ギリシア語	φιλοσοφια		
	ラテン語	philosophia		
フランス語	philosophie	イタリア語	filosofia	F 方式
ドイツ語	Philosophie	スペイン語	filosofía	
英　語	philosophy	ポルトガル語	filosofia	
オランダ語	philosophie			

これで分かるように，イタリア・スペイン・ポルトガルでは実際の音のとおりに f とつづることになったが，仏・独・英・蘭では ph と書いて /f/ と読むという無理をつづけているわけだ．

若先生： そういう読み方が「無理」といえるかどうか．彼らは phone を fone と読むことに，べつに抵抗はないわけですから．

わたし： ph を /f/ と読むことは，慣れた眼には「当たり前」みたいにみえるが，これは1種のボケなんだよ．

若先生： そうすると，仏・独・英・蘭その他，ph と書いて /f/ と読ませている言語は，つづりにかんしてはひどく「保守的」なのですね．

わたし： そのとおり．「歴史的仮名遣」にしがみついているようなものだ．

若先生： 問題は，ラテン語のつづりとしての ph が f と同じく /f/ と「発音」されるにいたったのは何時頃なのか，ということでしょう？

わたし： ニーダーマンによると，まずギリシア語のほうで紀元2世紀頃に Φ, φ が /f/ を表わすにいたった．

若先生： ギリシアが先だったんですか．

わたし： これは現在までつづいている．現代ギリシア語では φιλοσοφια というつづりは古代のままだが，読み方は「フィロソフィア」だ．

若先生： 紀元2世紀以後，それをローマ人が引き継いだ？

わたし： ギリシア語における音の変化がラテン語の世界に及んで，ローマ人が ph を /f/ と読むにいたった，と説かれている．

備考： M. Niedermann, Précis de phonétique historique du latin, 1953, p. 86. 遠山一郎教授のご教示による．

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com